

SHOW HEY シネマルーム

★★★

新仁義なき戦い／謀殺

2003 (平成15) 年3月3日鑑賞

Data

監督：橋本一

出演：高橋克典／渡辺謙／小林稔侍

👁️👁️ みどころ

1970年代に、広島の実録ヤクザ抗争を舞台として大ヒットし、菅原文太を一躍スターダムに押し上げた実録ヤクザ路線『仁義なき戦い』ほどの「組」抗争の迫力はないものの、跡目相続をめぐる展開される権力闘争の中での人間模様がよく描かれている。しかし今はヤクザも冬の時代……。渡辺謙は、思わずこれはホンモノ……と思わせるほど、さすがの演技。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<久しぶりに観たヤクザ映画>

この映画は、飯干晃一の原作『新仁義なき戦い／謀殺』を基に、『新仁義なき戦い／謀殺』製作委員会が製作し、第15回東京国際映画祭に公式参加した作品。メジャー系ではなく、マイナーな映画館ながらもロードショーされている。監修は、山口組顧問弁護士として有名になった山之内幸夫弁護士（作家?）。山之内弁護士は年は私より少し上だが、弁護士としては1年後輩にあたり、裁判所のすぐ前に事務所を構えているため、時々裁判所の中やその周辺ですれ違うこともある。ヤクザの顧問弁護士だからといって、特別「そんな雰囲気」を持っているわけではなく、礼儀正しく、仕事も誠実そのもの。マスコミが興味本位で取り上げる視点だけで、山口組顧問弁護士を評価するのは一面的だと言わざるを得ない。まあ、それはいいとして……。

<私の中学時代のヤクザ映画—『男の紋章』>

日活の任侠ヤクザ映画である高橋英樹主演の『男の紋章』の第1作が作られたのは1963年。私が中学生の時だ。3本立て55円の映画館へ1人で出かけ、必死で観ていた不良少年(?)の自分の姿を今でもよく覚えている。吉永小百合、浜田光夫の純愛コンビの

向こうをはって、高橋英樹が和泉雅子とコンビを組んで作ったこの映画はシリーズ化され、全10作が作られた。ちなみに私は、この頃の日活映画はそのほとんどすべてを観ている。

ヤクザを嫌って医者になった主人公竜次（高橋英樹）は、父親の死亡を契機として運命的に組の跡目を継ぎ、ついに立ち上がる。ヤクザと医者という異色のキャラクターをもつ主人公を高橋英樹が見事に演じ、大スターへの登竜門となった作品だ。

<東映任侠映画の全盛期>

1960年代のヤクザ映画は何とんでも高倉健の『網走番外地』シリーズ（9年間で全18作）と『昭和残侠伝』シリーズ（全9作）だ。高倉健と池部良の2人が最後の殴り込みをかけるときに流れる『昭和残侠伝』の主題歌、「唐獅子牡丹」は大ヒットし、1960年代後半の学生運動、特に「全共闘運動」に大きな影響を与えた。

私が大学2年生の時、つまり1968年の第19回東京大学駒場祭のテーマは、たしか「止めてくれるな、おっかさん。背中のおちょうが泣いている。男東大どこへいく。」だった。さらに、「緋牡丹のお竜」こと藤純子の『緋牡丹博徒』シリーズ（全8作）も、1960年代後半から70年にかけて大人気となった。まさに東映の任侠ヤクザ映画路線の全盛期がこの時期だ。

<任侠路線から実録路線への転換>

東映のヤクザ映画を任侠路線から実録路線へ転換させたのが、『仁義なき戦い』だ。1973年に第1作が作られた『仁義なき戦い』は、広島でのヤクザ抗争をモデルにした東映「実録ヤクザ映画」の傑作で、1973年以降全9作が作られた。そしてこのシリーズで、菅原文太が一躍東映の看板スターとなった。

<今なぜ、『新仁義なき戦い』謀殺』か>

「暴対法」の施行後、広域暴力団、ヤクザの表立った「抗争」は影を潜めている。また日本全体の経済不況もあって、その「活動」は停滞しているかにみえる。しかし覚醒剤や売春（ピンクビラ）をはじめ、各種経済活動の裏にヤクザがうごめいていることは昔も今も変わりはない。そんな中、なぜ今『新仁義なき戦い』謀殺』なのか……。実はそこがよくわからない。

<テーマは権力闘争>

高橋英樹主演の『男の紋章』シリーズや健さんの『任侠ヤクザ』映画では、理不尽なヤクザの横暴に対して、「正義派」のヤクザが我慢に我慢を重ね、じっと耐え、最後に堪忍袋の緒が切れる。そして男一匹敢然と立ち上がって、殴り込みをかけ、悪をこらしめるという単純なものだが、とにかくカッコよく仕上がっていた。女性版もそのストーリーは同じ

で、緋牡丹お竜さんとはとてもカッコよかった。しかし、1973年以後の『仁義なき戦い』になると、そんな夢みたいなスーパーヒーローヤクザは登場しない。現実には描かれるものは、金と権力と支配欲をめぐるドロドロとした組同士の抗争であり、その中で人の人間、ヤクザ同士のぶつかり合いだった。そして、今『新仁義なき戦い／謀殺』というタイトルをつけたこの映画も、ヤクザに焦点をあてて、「権力闘争」の姿を描いたものだ。

<高橋克典と渡辺謙そして小林稔侍>

尾田（小林稔侍）は尾田組の組長。藤巻（渡辺謙）はその若頭。矢萩（高橋克典）は藤巻を助ける若頭補佐。次期組長は、藤巻と固く信じ、これを補佐することに徹している矢萩だが、なかなか引退しようしない尾田はタヌキ中のタヌキ。時には権力を使い、時には猫なで声でアチコチに声をかけ、「保身」を図っている。そして、今日まで尾田組を大きくしてきた藤巻と矢萩は兄弟分の絆で結ばれている。しかし、藤巻は根っからの武闘派だが、矢萩は経済派、頭脳派、と全く異質のパーソナリティだ。そして、この映画の主演は矢萩。矢萩は純粋に兄貴分の藤巻を信じ、尾田を引退させて、藤巻を次期組長に立てようと考えているが、なかなか周囲はそうお進めてくれない。そればかりが、尾田の裏工作のため、いつの間にか跡目をめぐって矢萩と藤巻は対立する立場におかれてしまう。そして尾田組の組長の座をめぐる内部闘争は、その縄張りとし権を手に入れようとする東京の組織をも巻き込んでいった。

<派手なピストルの撃ち合い>

映画は冒頭、飲み屋からの帰り途、部下やホステスたちを連れて機嫌よく歩いている尾田組の組長が襲われる場面から始まる。ホステスたちも巻き込んだ、派手なピストルの撃ち合いだ。続いてその反撃のための殺しという実行行為を自ら白昼堂々と行ったのが藤巻。しかし、藤巻は完全黙秘を通し、結局不起訴処分となり、出迎えにきた矢萩と共に会心の笑みをもらす。しかし、弁護士としての私は、山之内弁護士が監修しながら、「そりゃないやろ・・・！」と思ってしまう。でも・・・そんな難しいことは言わなくても、まあいいか・・・。

さらに、跡目を狙う武闘派の藤巻は名古屋に進出し、そこで数々の抗争を引き起こす。その結果、派手なピストルの撃ち合いが何回も登場する。矢萩自身もピストルを使うし、最後には矢萩も信頼している部下から、ピストルで撃たれて死んでしまう。しかし、今時の日本で、一般市民を巻き込んだ白昼のこんな派手なピストルの撃ち合いなどあるはずがない。テレビ界で優れた演出手腕を発揮して高い評価を得た35歳の若手橋本一監督が大抜擢をうけて映画進出したとのことだが、これはちょっと考えてもらいたい。もっとも、これは監督の責任ではなく企画、脚本の問題か・・・。高橋克典も渡辺謙もいい役柄でい

い演技しているのだが、このド派手なピストルの撃ち合いは、ちょっと現実味をそいでしまっている感じがして残念だ。

<総評>

武闘派ヤクザ藤巻を演ずる渡辺謙の演技はさすがと思わせる迫力で出色の出来。これだけ怖いヤクザの雰囲気をよく出せるものだと感心してしまう。他方、若手二枚目俳優の高橋克典もいい。多少線が細いかなとかキレイゴトすぎるかなと思う面もあるが、まあ渡辺謙と対抗するキャラとしてはよくやっていると思う。女優陣は矢萩を慕う南野陽子はさしみのツマだが、藤巻の妻を演ずる夏木マリは存在感抜群。男同士の友情を信じ、「矢萩は俺を次期組長にすると言っとるんや！」と言う藤巻に対し、その妻は「あんた、甘いワ!」「人間は・・・おっとりしい生きモンや!」と述べる。何とも女は怖いもの・・・。

特別の感動作ではないが、まずまずよくまとまった作品だと思う。それにしても観客の少なさが気になるが・・・。

2003 (平成15) 年3月4日記